慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「戦争は地上になくてはならない」：ノヴァーリスの戦争表象について
Sub Title	,,Krieg muß auf Erden seyn" Poetisierung des Krieges bei Novalis
Author	高橋, 優(Takahashi, Yu)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.32 (2015. 3) ,p.67- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：「戦争と人間」
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20150331-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「戦争は地上になくてはならない」

――ノヴァーリスの戦争表象について――[1)]

高橋　優

1. 序

「ノヴァーリス」の筆名で知られるフリードリヒ・フォン・ハルデンベルク（1772-1801）の弟、カール・フォン・ハルデンベルクはノヴァーリスの死後 1802 年、彼についての短い伝記を残している。ノヴァーリスが 1790 年から 94 年にかけてイェーナ、ライプツィヒ、ヴィッテンベルクの各大学で学んだときのことについて、カールはこう記している：

> 「この修養時代の間に一度だけ、彼（ノヴァーリス）の日常生活に、ある興味深い断絶が訪れました。フランス革命戦争が始まると、彼の心には戦争に対する突然の意欲が目覚めました。その意欲は両親、親戚が一丸となって頼み込むことで、なんとか鎮めることができました。」[2)]

1792 年 4 月、フランス革命政府はオーストリアとプロイセンの対仏同盟軍に対して宣戦布告を行い、ラインラントに侵攻する。以降フランス革命の混乱はノヴァーリスの思想形成及び著作活動に対し生涯に渡り影響を

---

1) 本論文は平成 26 ～ 28 年度科学研究費基盤研究(B)（研究課題名「文理融合・教科連携に基づく創造的復興教育モデルの構築」研究課題番号 26285194、研究代表者：中村洋介）の成果の一部である。

2) Novalis Schriften, hg.v. Paul Kluckhohn und Richard Samuel, Stuttgart 1960ff., IV, 532.　以下、ノヴァーリスの引用は全集の巻号、ページのみを記す。

与え続ける[3]。ノヴァーリスはライプツィヒ大学在学中の 1793 年 2 月 9 日、父親に宛てた長大な手紙において「軍人になることが私の願望の極致です」（IV, 104）と、明確にその意志を告げている。しかしその動機は、カールが述べるように戦争に対する意欲が主ではないようである。同じ手紙でノヴァーリスは「ある娘[4]に恋をした」ことを打ち明け、「男らしくあること（Männlichkeit）こそが私の努力の目的なのです」と宣言する（IV, 106ff.）。彼が従軍を志願した目的は戦争そのものではなく、自身が恋人のため、男性として、成人として一人前に成長することにあった。これは同じ手紙の次の箇所からも明らかである：

> 「私にとって軍隊における服従、秩序、単調さ、そして思考停止（Geistlosigkeit）はとても有益になるでしょう。ここで私の空想は、それにつきまとう子供らしさ、若者らしさを失くし、一つの組織の厳格な規則に従うことを強いられるでしょう。」（IV, 109）

1800 年にノヴァーリスは当時のことを回顧して、彼女が「突然私に軍人の身分という中道（Mittelweg）を掴ませた」（IV, 310）と述べている。「軍人になる」という当時の決意は、戦争という非日常的状況に身を置くことを意図するものではなく、あくまで日常生活の一形態としての従軍生活において中庸を身につけることが目的であった。両親に説得されて以降、ノヴァーリスが実生活において対フランス戦に直接関わることはなかった。

だが「中道」を目指し軍人を志した実生活とは異なり、著作活動においてノヴァーリスは熱狂的に革命、そして戦争を支持し、美化するかのように思われる箇所が見受けられる。郡長ユストによる伝記に従えばノヴァーリスは「ロベスピエールの恐怖政治に対し［…］その首尾一貫性の故に賛辞を」呈したとされる（IV, 540f.）[5]。さらに未完の長編小説『ハインリ

---

3) vgl. Martina Lüke: Worte wie Waffen: Krieg und Romantik, Göttingen 2013, S. 42f.

4) ここで言われているのは Julie Eisenstuck (1775-1844)という女性である。vgl. IV, 772, Erläuterungen der Herausgeber.

5) この指摘に関しては以下を参照：フレデリック・C・バイザー『啓蒙・革

ヒ・フォン・オフターディンゲン』続編の構想においては「人々は互いに殺し合わなければならない—それは運命によって倒れるよりも高貴である。彼らは死を求める。[…] 地上では戦争が棲みついている—戦争は地上になくてはならない」(I, 346) という覚え書きが残されている。しかしノヴァーリスにとっての理想は当然、恐怖政治と戦争ではなく「永遠平和の聖なる時代」(『ヨーロッパ』) (III. 524) であり、「永遠の王国」(『オフターディンゲン』) (I, 315) に他ならない。

「中道」を目指す実生活に対し、ノヴァーリスの著作においては「戦争」と「永遠平和」という両極端がともに美化され、理想化されてゆく。ノヴァーリスの内的矛盾とも受け取られうるこの現象を解明し、ノヴァーリスの戦争表象に一貫性を見いだすことが、本論考の目的である。

2. 歴史哲学

1799 年 11 月に朗読されたとされるエッセイ『ヨーロッパ』においてノヴァーリスは、平和へと至る歴史のプロセスにおける戦争の役割について述べている：

> 「抗争する強国同士の間で平和条約が締結されることはない。あらゆる平和条約は幻想であり、単なる停戦状態に過ぎない。[…] 戦争がもう十分かどうかは誰にもわからない。[…] 諸国民が、彼らを堂々巡りに駆り立てる恐ろしい狂気に気付かない間は […] ヨーロッパ中に血が流れ続けるだろう。」(III, 522f.) [6]

平和条約が実際には停戦条約に過ぎず、現段階の人類にとって戦争は不可避である、という認識は、イマヌエル・カントの議論をふまえたもので

命・ロマン主義：近代ドイツ政治思想の起源　1790-1800』杉田孝夫訳、法政大学出版局　2010 年、526 ページ。

6) ノヴァーリスのテクストの翻訳は以下を一部参照している：『ノヴァーリス作品集』今泉文子訳、全 3 巻、ちくま文庫　2006/2007 年、『青い花』青山隆夫訳、岩波文庫　1989 年。

ある。カントは 1795 年、『永遠平和のために』において「将来の戦争の素を密かにはらんだ平和条約」は単なる「停戦条約」に過ぎないとして禁止すべきであると述べる[7]。

また、1786 年に執筆された『人類の歴史の憶測的起源』においては、永遠平和の前段階としての戦争の必要性が論じられている：「[…] 人類がいま立脚している文化の段階では、文化をさらに発展させるためには戦争は不可欠な手段となっているのである。文化の完成の後にのみ […] 永遠に続く平和はわれわれにとって有益となる […]」[8]。同じ論考の中でカントは、「黄金時代への願望」を「労苦の無い生活を怠惰のうちに夢見るように享受し、子供の遊びのうちに日々を無駄に過ごす時代」に対する「空しい憧れ」に過ぎないと断罪する[9]。カントにとって「永遠平和」の実現とは、「文化の完成」の後に果たされるべきもの、つまり人類の進歩の果てに達成されるべきものであり、無垢なる原初の楽園への回帰を意味するものではない。

1795/96 年に執筆された『フィヒテ研究』においてノヴァーリスは、フィヒテを離れカントにそった文脈で「人間の目的は黄金時代ではない。人間は永遠に存在し、美しく秩序づけられた個人でいつまでもあり続けなければならない」（II, 269）と断言している。無垢な状態への回帰ではなく人類の完成を理想とし、そこに至るためのプロセスとして戦争を位置づけている点において、ノヴァーリスの歴史観はカントを踏襲していると言える。

---

7) Zum ewigen Frieden. Ein philosophischer Entwurf, in: Immanuel Kants Werke, hg.v. Ernst Cassirer, Berlin 1921ff., Bd. 6, S. 427f.　カントのテクストの翻訳は以下を一部参照している：『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他 3 編』中山元訳、光文社古典新訳文庫　2006 年。

8) Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte, in: Immanuel Kants Werke, Bd. 4, S. 340. この箇所に関しては以下を参照： Hans-Joachim Mähl: Die Idee des goldenen Zeitalters im Werk des Novalis: Studien zur Wesenbestimmung der frühromantischen Utopie und zu ihren ideengeschichtlichen Voraussetzungen, 2. Aufl. Tübingen 1994, S. 320.

9) Immanuel Kants Werke, Bd. 4, S. 341.

だがノヴァーリスにとっての理想は、カントのように歴史の果てにおいてのみ実現されるものではない。カントは1793年、『単なる理性の限界内の宗教』において、人類の教育のプログラムを「地上において可能な最高善への継続的な進歩と接近」[10]と定義している。キリスト教的千年王国思想を元にカントは「世界共和国としての民族同盟に基づいた平和の状態」を目指す「哲学的千年王国思想」を提唱する[11]。ノヴァーリスは『ヨーロッパ』において「いつなのか、一体いつなのか。それは問うべきではない。辛抱あるのみ。永遠平和の聖なる時代［…］は来るであろうし、来るに違いない。」（III, 524）と述べ、歴史の果ての永遠平和を構想する一方、『フィヒテ研究』においては「千年王国が到来する必要がなければ―人類は人類ではない」としながらも「人類における完成の原理は［…］日常生活のあらゆる細部に、全てにおいて見ることが出来る」（II, 291）と主張し、未来ではなく現在において理想の実現を見ようと試みる。

ルートヴィヒ・シュトッキンガーによると、絶対的なものは理性には到達不可能であり、現象世界の事物の中に超越的なものとのつながりを見ようとする努力以外に、絶対的なものに接近する手段はありえない、というのがロマン主義者たちに共通の確信であった[12]。それゆえ「永遠平和」もまた、現在において感覚的に把握できるものとして構想されねばならない。初期ロマン主義者たちにとって、理想を現在において象徴的に提示する手段として要請されたものが「革命」である。例えばフリードリヒ・シュレーゲルは1797年、『リュツェーウム断片』において「神の国を実現させるという革命的願望が［…］現代史の始まりである」[13]と述べる。ノヴァー

---

10) Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft, in: Immanuel Kants Werke, Bd. 6, S. 283.

11) Immanuel Kant: ebd., S. 173.

12) vgl. Ludwig Stockinger: „Es ist Zeit“. Kairosbewußtsein der Frühromantiker um 1800, in: Jahrhundertwenden. Endzeit- und Zukunftsvorstellungen vom 15. bis zum 20. Jahrhundert, hg.v. Manfred Jakubowski-Tiesen u.a., Göttingen 1999, S. 277-302, hier S. 284.

13) Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe, hg.v. Ernst Behler u.a., München, Paderborn, Wien 1958ff., Bd. 2, S. 201.

リスも『フィヒテ研究』において、革命による理想の実現を要請している：「アダムとエファ。革命によって生じたことは、革命によって止揚されねばならない。/林檎を噛むこと/」（II, 275）。ただし、後者の革命によって実現されるべき楽園は、原初の無垢な楽園ではない。百科全書のための覚え書き『一般草稿』には次のような記述がある：

> 「聖書は華やかに楽園から［…］始まり、永遠の国で［…］終わる。その二つの構成要素もまた、真に大歴史的（*Großhistorisch*）である。新約聖書の始まりは二度目の、より高次の堕罪であり―［…］新しい時代の始まりである。どんな人間の物語も聖書になるべきであるし―聖書になるであろう。キリストは新しいアダムである。再生の概念。聖書は執筆活動の最高の使命である。」（III, 321）

「二度目の、より高次の堕罪」とは、無垢への回帰ではなく「人間の自己超克」（II, 535）に他ならない。それは歴史の終焉を表すものではなく、自らが新たな歴史を作り出す原動力となることを意味する。ノヴァーリスは初期ロマン派的聖書として長編小説『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』を構想する。主人公ハインリヒは、恋人となるマティルデとの出会いの場面において、自らをアダム、さらにはキリストとなぞらえ[14]、第二の堕罪の当事者となる使命を予感する：

> 「人生の喜びが、黄金の果実をいっぱいに実らせた鳴り響く樹のように彼の前に立っていた。悪は姿を見せず、かつて人間がこの樹から危険な認識の果実へと、戦争の樹へと向かっていったなんてありえない、と彼には思われた。彼は今、ワインと食事を理解した。」（I, 272）

「鳴り響く樹」とは、創世記に描かれる「認識の樹」の詩的変種であると考えられる。『オフターディンゲン』遺稿には「ハインリヒは［…］〈鳴

---

14) vgl. Yihong Hu: Unterwegs zum Roman. Novalis' Werdegang als Ubergang von der Philosophie zur Poesie, Paderborn 2007, S. 178.

り響く樹〉になる」（I, 344）と書かれている。ハインリヒは「鳴り響く樹」の果実を食べ、「二度目の堕罪」を経験し、自らが「鳴り響く樹」となることで、人類の新たな歴史の出発点となるのである。この場面において注目すべき点は、「鳴り響く樹」と同時に「戦争の樹」もまた「認識の樹」の詩的変種として描かれていることである。「戦争は地上になくてはならない」（I, 346）という覚え書きは、戦争の賛美を意図したものではなく、戦争が人類の原罪の結果としての必然的事象として捉えられていることを表している。「全人類は詩的になる。新たな黄金時代」（I, 347）という遺稿に従えば、「人類」とともに「戦争」もまた「第二の堕罪」によって詩化されねばならないのである。

3. 十字軍と東洋の女

マティルデの父クリングゾールはハインリヒにこう語る：「真の戦争とは宗教戦争だ。それはまさしく破滅へと突き進む。すると人間の狂気が全き姿を表すのだ。」（I, 285） クリングゾールに出会う前、ハインリヒは十字軍遠征に参加した騎士たちと会話している。騎士たちは「キリスト教の神聖な生誕地が呪わしくも今なお異教徒の手にあること」に「憤懣」を感じ、ハインリヒにも「神聖な墓丘の解放のために生涯尽力し、両肩に奇跡を呼ぶ十字勲章を付けてもらうよう」鼓舞する。さらにここで、「新たな十字軍遠征が目前に迫って」おり、「皇帝自らが我々の軍勢を東方へと導く」であろうことが告げられる（I, 230f.）。

「皇帝」とは全集編者によると、神性ローマ皇帝フリードリヒ II 世（1194-1250）である。彼は 1228/29 年、十字軍を率いてエルサレムを攻略している[15]。その際、皇帝はスルタンと戦うこと無く停戦の合意を結び、自らエルサレム王国の王冠を頭に抱いたとされる[16]。『オフターディンゲ

15) vgl. Erläuterungen der Herausgeber, I, 628.

16) vgl. Ludwig Stockinger: Toleranz und Begeisterung oder Krieg und Frieden in Jerusalem. Bemerkungen zum Verhältnis von Religon und Toleranz in Aufklärung und Romantik am Beispiel von Novalis, in: Novalis und die Aufklärung. Katalog zur Ausstellung im Novalis-Schloß Oberwiederstedt und im Romantikerhaus Jena, hg. v. ders. u. Gabriele Rommel, Oberwiederstedt 2004, S. 10-18, hier S. 15.

ン』遺稿においては、フリードリヒ II 世は「神秘的皇帝」（III, 672）として再登場し、「キリスト教と異教との和解」（III, 677）が実現される構想がある。この構想は一見、フリードリヒ II 世の十字軍を「真の戦争」としての「宗教戦争」とみなし理想視したもののように思われるが、実際は異なっている。イラ・カスパロフスキはノヴァーリスが十字軍の理想と現実の差異を明確に描いていると指摘している[17]。騎士達の会話の中にも、彼らが敬虔な信仰心だけではなく、権力、所有、女性に対する欲求に駆り立てられていることがほのめかされている[18]：「おまえも剣の扱いがうまくなれば、美しい捕虜には事欠かないだろうね。」（I, 231）

十字軍の理想と現実の乖離は、東方から捕虜として連れてこられた女性ツーリマの嘆きによって一層鮮明となる：

> 「恐ろしい、無駄な戦争なんか無理に始めなくても、キリスト教徒達はどんなに平穏に聖なる墓丘を訪れることができたことでしょう。戦争は皆を憤慨させ、果てしない不幸を広め、東洋をヨーロッパから永久に引き離してしまいました。［…］聖なる墓丘が幸福な合意のゆりかごに、永遠の有益な同盟のきっかけになればどんなにすばらしかったことでしょう。」（I, 237）

当然のことながら、聖地奪還と東洋の女を略奪することの間には何の因果関係もなく、拉致は聖なる使命の名のもとに認められうるものではない。ノヴァーリスは一見、ツーリマに十字軍批判をさせることで東洋を正当化し、西洋を批判しているように思われる。ツーリマはアラビアの「ロマン的な美しさ」を賛美し、ハインリヒはツーリマに対し「同情で胸がいっぱい」になる（I, 236）。だがツーリマの態度もまた問題を孕んでいる。「永久に引き離してしまった（auf immer [...] getrennt hat）」は直接法現在完了であり、完全なる断定である。従ってツーリマにとっては東洋と西洋が今後和解することはあり得ない。また、最後の一文「どんなにか［…］でし

---

17) Ira Kasperowski: Mittelalterrezeption im Werk des Novalis, Tübingen 1994, S. 212.
18) Stockinger: ebd., S. 14.

ょう（hätte [...] werden können）」には、接続法 II 式の非現実話法の完了形が用いられている。つまりツーリマにとって「聖なる墓丘」は金輪際「幸福な合意のゆりかご」にも「永遠の有益な同盟のきっかけ」にもなり得ないのである[19)]。

次の朝、別れの際にツーリマはハインリヒに兄の形見のラウテを贈ろうとするが、ツーリマの幸福な日々の思い出の品を受け取ることをハインリヒはためらい[20)]、彼女の「髪に結んだ、見知らぬ文字の書かれた金の紐」（I, 238）を代わりに求める。ツーリマは「これは私の母語の文字で書かれた私の名前です」（I, 239）と言い、髪紐を差し出す。„Zulima“ とは、アラム語に由来し「幸福」や「平和」を意味する名前である[21)]。しかし、西洋と東洋が永遠に引き離されてしまったと考えるツーリマの体現する平和は、遺稿にあるような「キリスト教と異教との和解」ではなくイスラム世界内部に限られた平和状態であり、文化の完成の末に実現されるべき永久平和ではない。不純な動機を孕んだ十字軍が正当化され得ないのと同様、ツーリマの嘆きもまた、排他性をぬぐい切れていない点において完全には正当化され得ないのである。

4.「戦争」と「宗教」

クリングゾールとの対話においてハインリヒは「戦争」の「詩的な作用」について語る：

---

19) この点に関しては拙論を参照：高橋優「ドイツ・ロマン主義と『多文化共生』」 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報　第 5 号 (2013)、S. 23-32.

20) この解釈は以下を参照： Sabrina Hausdörfer: Die Sprache ist Delphi. Sprachursprungstheorie, Geschichtsphilosophie und Sprach-Utopie bei Novalis, Friedrich Schlegel und Hölderlin, in: Theorien vom Ursprung der Sprache, Bd. I, hg.v. Joachim Gessinger u.a., Berlin 1988, S. 468-497, hier S. 476.

21) vgl. James Hodkinson: Moving beyond Binary? Christian-Islamic Encounters and Gender in the Thought and Literature of German Romanticism, in: Encounters of Islam in German Literature and Culture, hg.v. ders. u.a., S. 108-127, hier S. 114f.

「人々は何か空しい所有のために戦わねばならないと思っています。でも実際はロマン的精神がそんな無益な悪行を自滅させるために彼らを駆り立てていることを知らないのです。彼らは詩のために武器を取り、どちらの軍勢も一つの見えざる軍旗に導かれているのです。」（I, 285）

それに対しクリングゾールはこう答える：「戦争においては［…］原水（Urgewässer）が動き出す。」（ebd.）「原水」とは、水に全ての物質の根源を求めたターレスから、ノヴァーリスの師であり、岩石の起源を水による沈殿作用とみなしたアブラハム・ゴットロープ・ヴェルナーに至る水成論説の伝統に根ざした概念である[22]。だが「空間は水に似ている［…］動的な結合の結果である」（III, 610）という言葉からも明らかなように、ノヴァーリスはヴェルナーのように岩石の生成を単なる静的な沈殿作用とは見なさない。ノヴァーリスにとって万物の根源たる「原水」は、そのものが動的であり、生み出された物質もまた生成、発展を続ける：「移行と異質なもの同士の結合ほど詩的なものは［…］ない」（III, 587）。ノヴァーリスは水が水素と酸素の混合物であることを知っていたようであり[23]、シェリングが『世界霊について』（1798）において展開した「自然の普遍的二元論の原理」[24]の影響を受けてはいたが、自然の生成を二つの相反する力によってのみ展開するものとは見なしていなかった：

「二つの力が均衡状態を目指すという概念は、あらゆる物質及び我々の生命の科学的プロセスの真実の描写としてはまだ何か不十分なところがある［…］。三角形の第三の辺—原理としての三位一体。— x が見つけられねばならない。」[25]

---

22) vgl. Erläuterungen der Herausgeber, I, 597.

23) vgl. Gary Alan Smith: The Romantic View of Science in Novalis' Notes and Fragments, Austin 1970, S. 42.

24) F.W.J. Schelling: Von der Weltseele, in: Werke, Historisch-Kritische Ausgabe, Hg.v. Hans Michael Baumgartner u.a., Stuttgart 1976ff., Band 6, S. 85.

25) Phil[osophische], pys[ikalische] und chem[ische] Aufsaeze (sic), in: Gabriele

自然の生成には相反する二つの力だけでなく、その二つを結びつける第三の力が不可欠であるというノヴァーリスの確信は、そのまま彼の歴史哲学にも当てはまる。『ヨーロッパ』においては、人間の歴史の展開においてもまた、争い合う二つの力を結びつける第三の要素が必要であるとノヴァーリスは説く：

> 「世俗の諸力が自ずから均衡状態に至ることは不可能である。同時に世俗的でも超越的でもあるような第三の要素のみがその課題を解決することができるのだ。」（III, 522）

ノヴァーリスにおける「同時に世俗的でも超越的でもあるような第三の要素」とは、「宗教」である。「真の宗教心にとって、我々を神性と結びつける中間項ほど必要不可欠なものはない［…］真の宗教とは、あの仲介者を仲介者として受け入れ—彼をいわば神性の器官とみなし—神性の感覚的な顕現とみなすことである」（II, 440/442）と述べる彼にとって、宗教の本質的目的は超越的な神の認識ではなく、その感覚的顕現としての仲介者への共感である。それゆえノヴァーリスにおいてはあらゆる宗教は「キリスト」という神と人間の仲介者を信仰の対象とするキリスト教的モデルへと還元される。

しかし「まだ宗教は存在しない［…］宗教が作り出され、生み出されなければならない—多くの人々の結びつきによって」（III, 557）という言葉に表れている通り、ノヴァーリスは現実のキリスト教を理想視しているわけではない。プロテスタントはヨーロッパに「破壊的戦争を伴う大きな内部分裂」（III, 509）をもたらし、「宗教的アナーキーの状態は一時的にのみ許されるにすぎない」にもかかわらずプロテスタントという「革命政府が永続することが宣言されてしまった」（III, 511f.）。カトリックもまた「根絶やしにされたも同様であり、教皇制は墓の中に埋もれ、ローマは二度目

Rommel: Quellentexte zum wissenschaftlichen Kommentar: Novalis. Werke in drei Bänden, Bd. 2, Leipzig 1989, S. 1-45, hier S. 6.

の廃墟となってしまった」(III, 524)。

1798 年 2 月、フランス軍はローマに侵攻し、教皇ピウス VI 世を拉致、幽閉し、教皇は 99 年 8 月に死去してしまう。ノヴァーリスが『ヨーロッパ』を執筆していたまさにそのとき、カトリック教会は教皇不在の状態だったのである[26)]。ノヴァーリスはロベスピエールが「宗教の中に共和国の中心と力を求めた」ことを「歴史的に興味深い試み」と評価するものの、フランスの宗教は「世俗的プロテスタンティズム」に過ぎず、フランス革命もまた「二度目の宗教改革」として批判する (III, 517f.)。

啓蒙主義的進歩思想の強い影響下にあるノヴァーリスにとって「前進的で、絶えず拡大する進化こそが歴史の素材」であり、そのためには「振動や対立する運動の交代」が不可欠である (III, 510)。「戦争の歴史的目的」はそれゆえ「ヨーロッパ諸国のより緊密な、より多様なつながりと接触」(III, 522) にある。「真のアナーキーは宗教を生み出す要素である」(III, 517) と主張するノヴァーリスは、政治的、宗教的に混乱を極めた当時のヨーロッパにおいて、あらゆる既存の権威にすがることなく、戦争により既存の秩序が崩壊した時に登場すべき新しい宗教に唯一の希望を見いだそうと努めたのである。

『オフターディンゲン』においてハインリヒが十字軍騎士の大義名分にも捕虜の嘆きにも完全には同調しないのと同様、『ヨーロッパ』においてもカトリック、プロテスタント、フランス革命軍のいずれにもノヴァーリスは完全に共感することはない。戦争もまた、行き詰まった既存の秩序の崩壊のための一過性の現象に留められねばならず、それ自体が永続的に正当化されるものではないのである。

5. 結語

1798/99 年に構想された百科全書のための覚え書き『一般草稿』においてノヴァーリスは「戦争術」に言及している：「戦闘の目的は―敵の軍勢を壊滅させることである。敵の軍隊は摩耗し、分解することによって、軍

---

26) vgl. Herbert Uerlings: Novalis (Friedrich von Hardenberg), Stuttgart 1998, S. 93.

隊として壊滅されうる。殺すことは術ではない」(III, 289)。

「単音から和音への移行は、もちろん不協和音を通じてなされる［…］共同体の狂気は狂気であることを止め、魔術となる」(II, 546f.)というノヴァーリスにとって、永遠平和への憧れとその前段階として現前する戦争は矛盾するものではなかった。戦争は人類がより高い段階へと至る詩的作用を持つものであり、敵の絶滅を意味するものではありえないのである。

『オフターディンゲン』第一部最後に語られる「クリングゾール・メルヘン」終局において、戦争を経て地上界と天上界が結ばれ、新王エロス(愛)と新王妃フライア(平和)の結婚により黄金時代の到来が告げられる場面、従者ペルセウスはエロスに「敵の残党です」と言って「白黒のマス目のついた石盤」を手渡す。それに対しフライアの母はこう言う：「チェスですね［…］あらゆる戦争はこの盤とコマに封印されました。これはかつての、暗い時代の名残なのですね」(I, 314)。戦争がチェスに閉じ込められたことは、「共同体の狂気」が「魔術」となったこと、すなわち戦争が詩化されたことを意味する。エロスとフライアの結婚により「二度目の堕罪」が遂行されたことにより、アダムとエファの原罪の結果として地上の原理となっていた戦争はその役目を終え、詩的象徴としてのみ機能することになる。ノヴァーリスの「新しい聖書」執筆構想において、戦争表象はその中枢の一端を担っていると言える。

(福島大学准教授)

„Krieg muß auf Erden seyn“

Poetisierung des Krieges bei Novalis

TAKAHASHI Yu

Mit der Kriegserklärung der französischen Revolutionsregierung gegen die österreichisch-preußische Koalition am 20. 4. 1792 begann der sogenannte „französische Revolutionskrieg“. Das verursachte den Entschluss des jungen Friedrich von Hardenberg (Novalis), „Soldat zu werden“. Seine plötzliche „Krieges Lust“ war nach einem Bericht seines jüngeren Bruders Karl „nur durch die vereinten Bitten seiner Eltern und Verwandten zu beruhigen“. Nachdem er sich von seinen Eltern überreden ließ, hatte er keinen solchen Wunsch mehr, aber die politische Verwirrung wegen der französischen Revolution beeinflusste sein Denken und Dichten bis zu seinem Tod.

Seine Auffassung des Krieges scheint zunächst widersprüchlich. Während er im Nachlass zum *Heinrich von Ofterdingen* sagt: „Auf Erden ist der *Krieg* zu Hause – Krieg muß auf Erden seyn“, hofft er im Essay *Europa* auf „die heilige Zeit des ewigen Friedens“. Dieser Widerspruch erinnert an Immanuel Kants Essay *Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte* (1786), in dem er den Krieg für eine notwendige Vorstufe des ewigen Friedens hält: „Auf der Stufe der Kultur also, worauf das menschliche Geschlecht noch steht, ist der Krieg ein unentbehrliches Mittel, diese noch weiter zu bringen“.

Aber der „ewige Frieden“ ist bei Novalis nicht bloß ein am Ende der Geschichte zu realisierender Zweck, sondern ein in der Gegenwart poetisch darzustellender. Da er den Krieg als ein unvermeidbares Ergebnis des „Sündenfalls“ von Adam und Eva betrachtet, kann der Krieg nach Novalis’ Auffassung nicht aus der irdischen Welt verschwinden. Die Darstellung des

„ewigen Friedens“ ist also nicht durch das Ignorieren des Krieges möglich, sondern dadurch, den Krieg in eine poetische Form umzuwandeln.

Die Poetisierung des Krieges bei Novalis zeigt sich am deutlichsten in der Endszene des sogenannten *Klingsohr-Märchens* im *Heinrich von Ofterdingen*, wo die Versöhnung der himmlischen und irdischen Welt realisiert ist, bei der „aller Krieg“ auf eine steinerne Platte und in die Figuren des „Schachspiels“ gebannt wird.

„Eine Bibel ist die höchste Aufgabe der Schriftstellerey“ schreibt Novalis im *Allgemeinen Brouillon*, einem Entwurf zu einer romantischen Enzyklopädie, und konzipiert *Ofterdingen* als die neue Bibel, in der durch den „2ten, höheren Sündenfall“ sowohl die ganze Menschheit als auch der Gegensatz zwischen Krieg und Frieden poetisiert werden sollten.